

醍醐寺本法華經積文音注攷

——仮名書音注の考察——

二 戸 麻砂彦

一 序 言

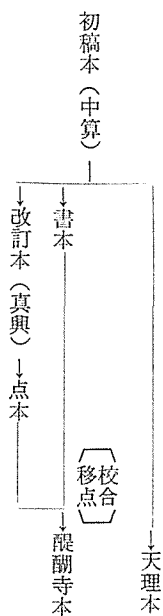
塵添璫義抄の本朝高僧伝（卷十五之六、鞍馬寺の條附説）に見える宗教論争、いわゆる応和の宗論は、平安時代中期における法華經盛隆の状況を示している。この事件で法相側の論客として名を高めた中算は、後に法華經積文なる著作を残した。すなわち、法華經本文の字句について、卷順に音注釈義を施した学術的字母である。本稿は、法華經積文が有する仮名書音注に着目し、その性格を明らかにするものである。

二 法華經積文の概要

本邦において法華經と言え、普通は妙法蓮華經七卷のことを指す。その伝来も早く、奈良時代から平安時代にかけて、すでに法華經音義と考えられるものがあつたらしい。元興寺信行撰の法華經音義二卷、法華經玄賛、伝教大師撰の法華音韻四卷、室生寺修円の法華訓記二卷、元興寺平備撰の法華經音義二卷などがそれであり、名のみ伝えられている。法華經積文はそれら諸音義に次ぐものであり、平安時代の法華經音義として、実在する最大の完本とも言えよう。中算自身の序文によれば、戸部藤納言藤原文範（九〇九—九九六）の命で、貞元元年（九七六）に脱稿した。先に述べた応和三年（九六二）の宗教論争から十四年後のことである。当時、

法華經の音義書はいくつかあつたが、満足できるものではなく、そこで捷公の単字（曇捷撰の法華經字積記一卷、東城伝澄目錄に書名が見える）を取り、基公の音訓（窺基撰の法華經音訓二卷、奈良朝見在一切經疏目錄に書名が見える）を用いたと述べている。この二書を中心として釈義を加え切韻をも用いて著されたものである。よつて、法華經積文は佚書となつた古代の音義類や中国の字書・韻書を正しく伝えていと認められ、法華經の読誦という本来の目的は当然のことながら、一般的な字書としての性格をも有していたことになる。この点から、法華經積文に付された仮名書音注を分析することによって、当時の法華經読誦音が明らかにされると同時に、本邦漢字音史の研究に大きな寄与をもたらすであらう。

仮名書音注も含めた加點・書き入れは、天理本には全く存在せず、醍醐寺本にのみ見られる。法華經積文の伝本としてはこの二本が知られており、中算の初稿本を転写したものである。宮沢俊雄氏によれば、左のような成立過程を示すことができる。



これによれば、天理本と醍醐寺本とは同じ中算の初稿本から出たもので

ある。しかし、醍醐寺本の方は、弟子真興が改訂し、さらに某人が加點・書入れた点本と、初稿本の流れを汲む書本とをともに校合移点したものであることがわかる。ここで問題となるのは、加點・書入れをした某人である。真興が中算の初稿本に手を入れたと思われるが、加點・書入れについては真興でないという研究が公にされている。おそらく、中算の学統を受け継ぐ真興の弟子の誰れかによってなされたのであろうと考えられる。中算自身の法華經読誦音ではないが、それに近い、あるいは中算の学問的伝統を身につけた者ではないかと想定されよう。ひとつの学的グループにおいて、はかかなり保守的に（正確にと言うべきか）その学統を伝えていく傾向が認められる。ゆえに、醍醐寺本に見える仮名書音注を分析することは、中算の法華經読誦音を明らかにすることになると言ってもよからう。以下その用例を〔表1〕（56頁）に掲げて、各韻ごとにその性格を考察していく。

三 醍醐寺本における仮名書音注の考察

仮名書音注の総用例数は二四四を数える。ただし、不明確なもの（61・128）や疑問の残るもの（87・96・117・188）、また「五」（73・74）・「巾」（105）・「生」（171）・「神六」（107）・「定六」（178）などの音注もあるが、ほとんどは仮名字体の音注である。また、法華經読誦音を正確に把握しようとした努力が見られて、三内鼻音などは、

m	韻尾	ム	(221・222・223 など)
n	韻尾	レ	(106・112・113 など)
ŋ	韻尾	レ	(1・2・3 など)

のようにm韻尾を「ム」で、n韻尾とŋ韻尾を「レ」で表わしている。両唇閉鎖音mとn・ŋとは、明確な区別を期待したのであろう。しかし、13・172ではŋに対して「ウ」を用いており、ŋ韻尾の音を「ウ」や「イ」で把えていく本邦漢字音史における字音享受の変遷をうかがうことができ

る。なお「レ」は、111のように入声韻尾に対しても用いられている。

さて、「表1」に掲げた仮名書音注について、各韻ごとにどのような表記がなされているかを〔表2〕に示した。たとえば、豪韻の「㊦ウ」（㊦はア列音の仮名であることを示す）は、「アウ」・「カウ」・「タウ」などの仮名書音注を含むものであり、豪韻における基本的な仮名書音注の表記と認められよう。以下、「表1」および「表2」にもとづいて、広韻の韻目に従い、醍醐寺本（以下「醍本」と略す）の仮名書音注を考察していくこととする。その際、時代的には降るが、同じ法華經読誦音を伝えていくと認められる保延二年本法華經^{金8}（一一三六年、以下「単字」と略称する）および元中三年本法華經音訓^{金8}（一一三八年、心空著、以下「音訓」と略称する）を参看して補いとする。

(1) 東韻（拗音）

1「チレ」・2「シレ」・3「ルレ」の三例があるのみで、数量的には満足がいかない。単字・音訓によれば「㊦ウ」・「㊦ユ」・「㊦ユウ」の表記が知られるので、醍本の基本的表記を「㊦レ」と想定してもよからう。ただし、3「隆^ルレ」については単字・音訓にも掲出字がなく、明らかではない。

(2) 屋韻（拗音）

〔表1〕の4・5・7の例に該当する。東韻（拗音）と同様に用例が少なくて確定できにくい。単字・音訓を参照すれば、基本的表記「㊦ク」を得られよう。5「牧^ホク」は、「ボク」と読むことを期待していたはずである。しかし、中古音を見ると *myuk* であるから、少なくとも明母 *y* を本邦ではマ行音として享受するのが一般的である。すなわち、「モク」という表記である（実際のところ、いわゆる呉音においては「モク」となる）。このようなズレはどう解釈するべきなのであろうか。仮に、本邦における音韻史の問題であるとすれば、「モク」→「ボク」というような

音韻の変遷を考えなくてはならなくなる。ところが、このような変遷は起っていないのである。とすると、これは中国側における音韻史上の問題に関連しているらしいことがわかる。ここでいう中古音とは、六朝末から隋初にかけての北方標準音である（具体的には、切韻系韻書の反切から帰納される音韻体系）。今日、中国語の音韻体系として、ほぼ完全に知ることのできる最古のものである。漢字音資料の分類整理上、たいへん有効な便宜でもある。この中古音の音韻体系は、唐代にはいと次第に変化をはじめ、唐代中期には相当な変化をとげることになる。その一つに、鼻音声母の *denasalization* ⁽¹¹⁾ があげられる。これは、鼻音声母の調音に際して、破裂に先立って口蓋帆の上昇が行なわれるようになり、鼻音声母の後半が非鼻音化する現象である。よって明母 *m* → *mb* のように変化していたわけである。醒本では、この *mb* というような声母の状態を享受し、仮名書音注としては「ホク（ボク）」と表記したのではないかと思われる。つまり、非鼻音化した声母 *mb* を本邦の法華經読誦に際しては、マ行音ではなくてバ行音で把握したのである。

(3) 沃 韻

8 「沃^ウ」の一例だけであるため確定できない。単字も「釋^ニ」の一例、音訓も「毒^{トク}」・「釋^ノ」の二例を数えるだけである。あえて基本的表記を示せば、「㊦ク」であろうか。

(4) 鍾 韻

9 ～13の五例である。9 「逢^{ホレ}」は、中国語音韻史上の輕唇音化を反映した字音把握の実状と認められる。すなわち「*biauŋ* → *ʔ(i)auŋ*」というような変化があり、唐代中期にはかなり著しい現象であつたらしい。本邦の法華經読誦に際して、この変化が享受されたと考えられ、無声化した奉母 *p* および拗介音 *ɥ* の弱化傾向などを反映した仮名書音注「ホレ」がなされたことになる。10 「恭^{クヨレ}」は興味深い例である。一般的には「キヨレ」

という表記を期待するところであるが、「クヨレ」となっている。単字・音訓では、「恭^ク」・「恐^ク」・「共^ク」・「供^ク」などが見られて、鍾韻の字音把握には特徴があることを物語っている。できるだけ中国語音に近い音を示そうとしたものであろうか。単字では、東韻（拗音）においても「宮^フ」のような例が見出される。11 ～13は、それぞれ「冢^{チヨレ}」・「勇^{ヨレ}」・「隴^{リヨレ}」とあつて、基本的表記「㊦ヨレ」を想定できる。12は喻母四等を声母とする例であり、醒本ではヤ行音で把握しているから、拗介音 *ɥ* が標出した「㊦ヨレ」と同じ字音把握の状況を示している。13の「リヨウ」における「ウ」という表記は、先に述べたように、リ韻尾を「ウ」で示そうとする過程を表わしたものであり、やがて本邦の漢字音史に著しく定着するものである。

(5) 獨 韻

14 「獄^{キョク}」・15 「足^{シヨク}」の二例。(3)沃韻と考え合わせれば、「㊦ヨク」が想定されよう。数が少量で不確定。

(6) 覺 韻

16 ～19の四例。「㊦ク」という基本的表記を認める。単字・音訓も同じ。ただし、17 「貌^{ハク}」における「ミヤク」には検討の余地がある。すなわち、二等專屬韻である覺韻では、拗介音 *ɥ* を表わすような仮名書音注を必要としないはずである。にもかかわらず、「ミヤク」とあるのは声母 *ɥ* を表記したいがためではなかろうか。中国側では、*mauk* → *mbauk* (2)で述べた鼻音声母の *denasalization* による変化) が起り、「ハク（バク）」と表記したが、一方で *mauk* という音も存在し、これを示そうとしたのではないか。ただし、「マク」とした場合、鐸韻明母字との混同を生じる恐れがあるために、「ミヤク」のような表記になった可能性がある。単字には鐸韻明母字として「莫^{マク}」・「漠^{マク}」の二例が見出される。

(7) 支韻（開口）

20～23の五例。基本的表記は「㉑」である。単字・音訓も同じ状況を示している。

(8) 支韻（合口）

24「瑞^シ」の一例だけである。単字では「瑞^{タイ}」とある。誤字であろうか。醒本の「シ」は「し」のような字体である。

(9) 脂韻（開口）

25～32の七例。すべて「㉒」を基本的表記とする。

(10) 脂韻（合口）

33～35の三例。単字・音訓を参看すれば、「㉓」が基本的表記として考えられる。33「達^ツ」については、合口要素・^ㄷをより明確にするための表記である。単字にも「愧^ツ」の例がある。

(11) 之 韻

36～41の六例。36を除外すれば、その基本的表記は「㉔」である。36「己^コ」と同様の例は単字・音訓にも見られるが、「己^コ」・「欺^コ」・「起^キ」・「記^キ」・「基^キ」のように同じ諧声符を有する字でも仮名書音注に違いがある。「コ」は一般的にいわれる呉音とするが、中古音では解決しない問題を含んでいる。あるいは、上古音によって検討を加えるべきかとも思われるが、いづれにしても古い字音享受の状況を引き継いでかなり保守性を残す表記ではなからうか。万葉仮名との比較も必要であり、その他の字音資料との対比も含めて、機会を新たにしたい。

(12) 微韻（開口）

42「希^キ」の一例。微韻所属字は元来その数が少なく、開口呼では牙・喉音に存在するだけである。単字でも八例を掲げているにすぎない。それによると、「幾^キ」・「豈^キ」・「既^キ」のように牙音字は「キ」と表記されるのに対して、喉音字は「希^ケ」・「悌^ケ」・「氣^ケ」・「衣^ヱ」・「依^ヱ」のように「㉕」である。この「㉕」は呉音的特徴と言われるものであるが醒本の「希^キ」とは合わない。

(13) 微韻（合口）

43「沸^ヒ」と44「彙^ヒ」の二例。(12)と同様に例数が少なく、確定しにくい。微韻唇音字は開合に対して中立であるため、43の「ヒ」は合口要素・^ㄷを示さない表記となっている。単字でも「非^ヒ」・「飛^ヒ」・「肥^ヒ」・「微^ヒ」・「未^ミ」などが知られ、唇音字の他には牙音字「ク^キ」、喉音字「キ」のような表記が見出される。

微韻は開口・合口ともに止摂諸韻の中では特徴的な表記を示している。これは、微韻の主母音・^ㄷが後舌的であるために、他の前舌的な主母音の諸韻とは異なる読誦音を要求したものであると認められる。事実、中国語音韻史上における止摂諸韻の合流に、微韻は最後まで抗したのである。

(14) 廢韻（合口）

45「吠^フ」の一例。「ヘイ」は「ハイ」の誤字と見るのが妥当ではないか。すなわち、輕唇音化によって *bai̯s* → *vai̯s* *bais* のようになり、「ハイ」と字音把握したのであろう。単字も「吠^フ」とする。

(15) 魚 韻

46～58の十三例を数える。基本的表記は「㉖」と認められる。ただし

審母二等字の例55・56では「所ッ」となっている。これは、その声母が、舌音^ㄌであるために拗介音^ㄨがない直音のように聴えたためか、あるいは聴えても極めて弱化していたためである。単字では表記に揺れがあり、「詛ッ」・「楚ッ」のような両表記が見られる。

(16) 虞 韻

59・66の八例。「㉔」を基本的表記とする。ただし、舌音・歯音では「㉔ウ」である。62「住ッ」や単字「殊ッ」がその例である。これは、拗介音^ㄨをより明確に把えた字音享受であり、逆に合口要素^ㄨの方をより明確に把えた場合は「㉔」と表記したわけである。単字において、喻母三等字は「于ッ」・「雨ッ」、喻母四等字は「與ッ」・「兪ッ」となっていることも参照に値しよう。

(17) 模 韻

67・78の十二例。「㉔」を基本的表記と認める。この中、73・74に見える「呉^五」は同音字注である可能性もあるが、日本語の濁音を明確に示すための処置とも考えられよう。

(18) 哈 韻

79・81の三例。数量に乏しいが、単字・音訓を参看すれば、「㉔イ」という基本的表記を得ることができる。

(19) 灰 韻

82・84の三例。84「恢^{クワイ}」のように、牙音字では合口要素^ㄨを明確にする表記となっている。単字にも「憤^{クワイ}」とある。唇音字の82・83は合口要素を示していない表記である。基本的表記を想定するならば「㉔

イ」となるが、例数に乏しい。単字・音訓でも「㉔イ」という表記（七例）になっている。

(20) 皆 韻（開口）

85「偕^{カイ}」一例。単字・音訓（七例）から考えると「㉔イ」の基本的表記が得られる。

(21) 皆 韻（合口）

86「淮^ヰ」の一例。単字も「恠^ヰ」・「懷^ヰ」・「壞^ヰ」の三例しかない。これら単字の「エ」は「エ」と正すべきであろう。とすると、合口要素^ㄨと主母音^ㄨを表記したものであり、韻尾^ㄨは聴覚上より弱く感じられたための音把握である。

(22) 夬 韻（合口）

唇音字である87「邁^{クワイ}」一例があるのみ。しかし、この仮名書音注と母字（被注字）は一致していない。そこで醒本の該当部分を次に掲げる。

快^{クワイ}（音通夬）（16ウ2） ※去声斜重点是次清音を示す。

すなわち、「クワイ」は「邁」に対するものではなく、「快」の仮名書音注と見るべきものであることがわかる。「快」の右側に書くための余裕がなかったのであろう。

(23) 齊 韻（開口）

90・94の五例。90を除くと牙・喉音字だけであり、「㉔イ」という表記が認められよう。単字・音訓でも牙・喉音字は「㉔イ」となる（唇・歯音字では「㉔イ」・「㉔イ」両表記が見られる）。90の「チ」は「テ」の字

体とも考えられる。韻尾 ㄷ を表記しない例は単字にもある（「底 ㄷ 」）。

㉔ 佳韻（開口）

96～98の三例。96の仮名書音注には疑問があり、これを除外すると二例しかなく、確定できない。単字も同様の状況である。

㉕ 佳韻（合口）

99「晝 ㄷ 」の一例。い、わ、ゆる、呉音の特徴と一般には認められている。

㉖ 祭韻（開口）

88・89の二例。「ㄷイ」の他に「ㄷイ」も考えられる。単字の用例では「ㄷイ」がほとんどであるが、「祭 ㄷイ 」も見出される。一応「ㄷイ」が基本的表記と見なし得るか。

㉗ 祭韻（合口）

95「鋭 ㄷイ 」の一例。「セイ」は「七イ」のように書かれており、「エイ」の誤字とも考えられる。祭韻合口字はそれ自体の所属字が少ないため不明確である。

㉘ 魂 韻

100「渾 ㄷ 」の一例。単字・音訓では「ㄷン」を基本的表記とするが、m韻尾を醜本のようにn・ㄹ韻尾から区別していない。

㉙ 没韻（合口）

101～103の三例。102・103に見える「トオ」・「ヲオ」は、それぞれ「トア

（トツ）」・「ヲア（ヲツ）」という字体の誤写であろう。101「没 ㄷ 」は「摩訶没特伽羅」に対する読音を示したもので、上声点が付されている。

㉚ 櫛 韻

104「瑟 ㄷ 」の一例。「摩訶俱瑟恥羅」に対する読音を示したもので、上声点が付されている（101に同じ）。

㉛ 眞 韻

105～107の三例。この中、106「晉 ㄷ 」は仮名書音注であるが、他の二例は同音字注のような表記である。105「緊 ㄷ 」は母字と注字が同音である。107「刃 ㄷ 」は一見すると反切注の観を呈しているが、詳細に醜本を検討すると、「音」、の字の書き損じが「六」のように表わされたものであることが認められる。「刃」と「神」とは声母を異にする（日母 ㄷ と牀母三等 ㄷ ）が、同音の把握を妨げるような注字選択ではない。

㉜ 質 韻

108～110の三例。108・109は「ㄷツ」という表記を示している。単字も「ㄷチ」である。110「質 ㄷチ 」は、「イ」を加えてその拗介音 ㄷ を強調するような表記となっている。なお、入声音 ㄷ を「チ」で示すのはいわゆる呉音の特徴であるが、醜本では多く「ツ」である。

㉝ 術 韻

111「律 ㄷ 」の一例。「リレ」とあって入声音を示していないが、入声点がある。「ツ」の誤写か。

34 文 韻

112 「問^モ」の一例。単字によれば、明母字は「モム」、その他は「^⑦ム」である。一例のみで確定できない。

35 物 韻

242 「欸^ク」の一例。醒本の該当部分を次に示す。

𪛗^{クウ}
強欸反

「𪛗」に対する反切注の下字「欸」の右側にある仮名書音注である。音訓によると「𪛗^ク」・「欸^コ」であり、醒本の「クウ」はむしろ「𪛗」の音注と考えるべきかもしれない（先の22における87の例と同様）。加えて、「クウ」は「ク于」のような字体であるため、「クチ」あるいは「クツ」の誤写という可能性がある。

36 寒 韻

113 115の三例。基本的表記「^⑦レ」を認めることができる。単字・音訓も同様の状況であり、例数も多い。

37 曷 韻

116 118の三例。11「割^カ」が基本的表記の例であると考えられるが、例数が少ないため不明確である。117「薩^セ」は切韻系韻書の一つである「薛峴」（該当の醒本の上巻では「薩峴」とある）に対して付された音注である。入声音「ツ」を読まない慣用だったものか。または「セチ」の誤であろうか。118「刺^セ」は「補刺拏梅恒利曳尼弗恒羅子」の読音を示したものであり、上声点が差されている。

38 桓 韻

119 121の三例。119「滿^マ」は唇音字の例であり、単字にも同じ例が見える。121「換^{クワ}」は匣母字の例である。合口要素^ㄩを明らかにしようとする表記である。単字でも牙音字および匣母字は「クワン」となっている。その他は「^⑦ン」である。120「渙^ト」は「ナム」の誤写という可能性もあるが、「^⑦レ」という表記になっていない。

37 末 韻

122 「𪛗^ヘ」の一例。入声韻尾^ㄩを表記しない仮名書音注であるが、入声点を有する。

38 點 韻（開口）

134 「𪛗^ッ」の一例。単字・音訓も例が少なく、確定できない。

39 元 韻（開口）

123 「軒^{ケン}」の一例。38と同様に確定できない。

40 元 韻（合口）

124 128の五例。124 128は唇音字の例であり、「^⑦レ」の表記が認められる。しかし、単字には「販^{ハン}」というような例もあって、表記に揺れがある。128「袁^{エン}」は匣母字の例である。合口要素^ㄩを示すためにワ行の「エ」を用いている。単字では「ヲン」となっている。

41 月 韻（合口）

129 「曰^{エチ}」の一例。128と比べれば、相配する入声音字と判明する。し

かし、孤例ゆえ確定できない。単字・音訓には用例がないため、醒本のこの例は貴重である。

(42) 仙韻（開口）

130～133の四例。基本的表記は「㊤レ」と認められる。中国語音韻史上に見える重紐A類とB類との区別は標出していない。132「騫ッ」は「佉羅騫馱」の読音を示している。

(43) 先韻（開口）

135～137の三例。単字・音訓をも考慮に入れると、基本的表記「㊤レ」を得られる。

(44) 豪韻

138～144の七例。基本的表記は「㊤ウ」と認められるが、唇音字には問題がある。すなわち、138「寶ホウ」・139「報ホウ」の二例である。単字も醒本と一致した例があり、唇音字については「㊤ウ」という表記を考えた方がよいであろう。

(45) 肴韻

145「樂カウ」の一例。単字では「㊤ウ」の表記が見られるが、確定できない。

(46) 宵韻

146～154の九例。基本的表記「㊤ウ」が得られる。154「擾ニッ」は不明である。あるいは「ニウ」（実際には「尔干」という字体）を「ネウ」の誤

写と考えるべきかもしれないが、152・153の同音字と一致しなくなってしまう。

(47) 歌韻

155・156の二例。単字・音訓を参看することにより、「㊤」の表記を得ることができる。

(48) 戈韻

157～159の三例は、すべて三等字である。これらの三例の字（「佉伽」）は、切韻殘簡によって歌韻三等に位置するものであることがわかるから、合口要素・ㄱの示されない「キヤ」・「カ」が付されているとは思議はない。ただし、「カ」のような拗介音・ㄱを示さない表記については、同じ戈（歌）韻の一等字から類推した可能性もあるが、三等字自体が中国語音には元来なかったものを胡僧らが加えたという事情によるのかもしれない。梵語音を表わすために付加された三等字と考えれば、法華經読誦音の中では特殊な立場にあると言える。

(49) 麻韻

160～162の三例。直音字「㊤」・拗音字「㊤ヤ」が想定される。単字・音訓もこれに同様である。しかし、例数が少ないため醒本の音注には確実なことが言えない。なお、120については拗音字「嗟」に対して「サ」となっている。これは醒本に

邪（似聲反）

のようにあり、母字（被注字）を表わす反切下字であるために、その中心母音のみを示したものであろうか。

50 唐韻（開口）

163・164の二例と少ないが、単字・音訓を参看すれば基本的表記「㉚」を得る。

51 鐸韻（開口）

165・166の二例。50と同様にして「㉚」が考えられる。

52 鐸韻（合口）

167の一例。単字・音訓には該当例がない。不明。

53 陽韻

168・173の六例。単字を参照してみると、舌音字・齒音字・影母字を除く喉音字・来母字においては「㉚ヤウ」（醒本では172がこれに該当する）、それ以外の字では「㉚ウ」（醒本では168・170・173がこれに該当する）である。171「相^生」は同音字注と考えるべきだろうか。sən（相）—sɛ（生）というように、母字と注字とはほぼ同音の把握が可能である。

54 藥韻（開口）

174「爵^{ヤウ}」の一例。相配的な位置にある53陽韻を考慮すると、「㉚ク」であろうか。孤例のため確定できない。

55 庚韻（開口）

175・177の三例。177は二等字であるから、拗介音^ㄨを示さない「マレ」という表記になっている。しかし、単字には「抗^{キヤウ}」・「猛^{ミヤウ}」のような二等字でも拗介音^ㄨを標出する例がある。三等字の例である175・

176は「㉚ヤウ」を期待したいところであるが、「ヘイ」・「メイ」と漢音的特徴の音注である。

56 清韻（開口）

178・181の四例。55と同じく漢音的特徴を示す「ㄣイ」が見られる。178「鄭^{定六}」は107と同様に「音」の字を「六」と書いたものか、あるいは書き損じによるものかと思われる。母字「鄭^{定六}」に注字「定^{ㄣイ}」であるから、同音の把握がなされたであろう。

57 昔韻（開口）

182・184の三例。これも漢音的特徴を示す音注である。「㉚ヤク」を期待したいが、「ㄣキ」となっている。184「鐸^{ㄣイ}」は「エキ」の誤写であろうか、入声点が差されている。184と同音である183「小^{ㄣキ}」は「エキ」である。

58 青韻（開口）

185・187の三例。同じく漢音的特徴を示す「ㄣイ」が見出される。「㉚ヤウ」を期待するところであるが、中古音^{ㄣイ}には拗介音^ㄨがない。これは、あるいは、梗攝諸韻の音注表記が「㉚ヤウ」であるために、直音である青韻を拗音的に表記する類推かもしれない。

59 錫韻（開口）

188「剔^{ㄣイ}」の一例。これは「大勇剔種界」の読音を示したものである。

60 尤韻

189・212・243の二十五例。189・191の唇音字は輕唇音化（4鍾韻を参照）の

ために直音として示されている。「㊦」がその基本的表記である。その他の字は「㊩ウ」という基本的表記で表わされる。重紐による音注表記の区別はない。また、211「久ク」のように牙音字を「㊦」で示す例は単字にも見出される「久ク」・「九ク」・「究ク」・「朽ク」・「舊ク」・「求ク」などがそれである。

(61) 侯 韻

213～220の八例。「㊦ウ」を基本的表記と認める。

(62) 侵 韻

229・230の二例。単字・音訓を参看すると、「㊩ム」という表記が想定される。

(63) 咸 韻

221「咸カム」の一例。単字も二例（「咸ケン・減ケン」）を数えるだけであり、確定できない。

(64) 鹽 韻

222・223の二例。単字によって「㊩ム」を想定したいが、確実なところは言えない。

(65) 添 韻

244「店テム」の一例。「㊩ム」を期待したいが、孤例ゆえに不明確である。単字は五例を掲げる。

(66) 談 韻

225～228の四例。「アム」を基本的表記とする。単字・音訓も同様の状況である。

(67) 業 韻

224「怯ケウ」の一例。これは漢音の特徴を示す表記である。単字には「業ゴウ」とある。

(68) 登 韻（開口）

231・232の二例。単字を参照すれば「㊦レ」という表記が想定されよう。

(69) 徳 韻（開口）

233・234の二例。(68)と同様にして「㊦ク」の基本的表記を得ることができよう。

(70) 蒸 韻（開口）

235・236の二例。「㊩ヨレ」が基本的表記であろう。単字も同様の状況である。

(71) 職 韻

237～241の五例。「㊩ヨク」・「㊦ク」が基本的表記と認められる。単字は「㊩キ」という漢音の特徴の音注が見出されると同時に、「㊩ヨク」・「㊦ク」もあって状況が複雑である。

四 結 言

醍醐寺本法華經釈文に存在する仮名書音注を分析してみると、多くは、いわゆる吳音的特徴を示していることが判明する。しかし、梗撰諸韻(60・61・62)のように、いわゆる漢音的特徴を有する表記が見られるものもあって、一元的に論ずることは困難である。また、中国語音韻史上における音変化の反映が見られて(2)・(4)・(6)・(60)、中古音だけによる分類整理から一歩進んで、唐代中期頃の標準語音をも考慮に入れる必要がある。すなわち、後の法華經單字や法華經音訓がかなり統一的にい、いわゆる吳音的特徴を示すのに対して、醍醐寺本の仮名書音注は複層的とも言えるような法華經読誦音を明らかにしている。いわゆる漢音的特徴を含んでいるのは、醍醐寺本の特殊性と認めるべきか、あるいはいわゆる吳音的な表記への混入と認めるべきか、さらに他の漢字音資料の分析が俟たれよう。

〔注〕

- (1) これらの音義書は、奈良朝見在一切経疏目錄や興福寺永超撰の東域伝燈目錄などに書名が見出される。詳細については、次の二論考を参照。

岡田希雄「至徳三年版心空法華經音訓解説」(貴重図書影本刊行会、昭和六年五月)

築島裕「平安時代語新論」(東京大学出版会、昭和四十四年六月。一三五頁～一三八頁)

- (2) 捷公の法華經字釈記と基公の法華經音訓は、漢土伝来の權威的音義書として重じられていた。(注1)の築島氏の論考参照。

- (3) 醍醐寺本法華經釈文は、古辞書音義集成第四卷(汲古書院、昭和五十四年十一月)に影印刊行されている。本稿はこれを底本とした。

- (4) 宮沢俊雄「妙法蓮華經釈文の初稿と改訂について」(国語と国文学、五十二卷六号、昭和五十六年六月、六六頁)

- (5) 小松英雄「日本声調史論考」(風間書房、昭和四十六年四月。五〇一頁)

- (6) 「表1」における「中古音」とは、Bernhard Karlgren 氏の『ancient chinese』の訳語である。なお、中古音の表記は三根谷説に従う。次の論考を参照。

Bernhard Karlgren: Etudes sur la phonologie chinoise (Archives d'Etudes orientales Publiées par J.-A. Lundell, Vol. 15, 1926)

高本漢著 趙元任・羅常培・李方桂合訳「中国音韻学研究」(商務印書館一九四〇年)

- (7) 三根谷徹「中古漢語の韻母の体系―切韻の性格―」(言語研究、第三十一号、昭和三十一年)、「越南漢字音の研究」(東洋文庫、昭和四十七年)、「唐代の標準語音について」(東洋学報、第五十七卷一・二号、昭和五十一年)

- (8) 本稿では「韻尾・日韻尾を表わす仮名として「レ(片仮名)」を用いているが、活字印刷の都合上、最も近似した字形を採ったものである。

- (9) 法華經單字は島田友啓「法華經單字漢字索引」(昭和三十九年一月)に、法華經音訓は同「法華經音訓漢字索引」(昭和四十年)に、それぞれよって

- (10) 水谷真成「唐代における中国語語頭鼻音」Denasalization の進行過程」(東洋学報、第三十九卷四号、昭和二十九年)に詳しく。

- (11) 二戸麻砂彦「石山寺一切経蔵本大般若經字抄音注攷」(漢吳二音相同)の音注の資料的分析」(国学院大学大学院紀要、第十二輯、昭和五十六年三月。二二二～二二三頁)

- 注(10)の論考、二一九頁の注(6)参照。

〔表1〕

NO.	母字	注字		中古音	所在	備考
1	蟲	チル	澄東開3	diaun ¹	上 5才2	
2	衆	シル	照邊開3	tsiaun ^{1,3}	上 5才2	
3	隆	ルル	來東開3	liaun ¹	上 16才7	
4	牧	ホク	明屋開3	minuk	上 7才7	
5	祝	シク	照屋開3	tsinuk	上 5才5	
6	祝	シフ (シク)	照屋開3	tsinuk	上 7才7	入聲氣不明確。仮名書注2箇有。
7	菽	シク	審屋開3	sinuk	上 6才3	
8	沃	ヨク	影沃合1	'auk	上 8才3	
9	逢	ホル	並腫合3	biaun ¹	上 17才1	
10	恭	コル	見鍾合3	kiaun ¹	上 12才1	
11	冢	チル	知腫合3	tiaun ²	上 12才2	
12	勇	ヨル	喻腫合4	jiaun ²	上 9才6	
13	隴	リョ	來腫合3	liaun ²	上 9才6	
14	獄	キョク	疑燭合3	giauk	上 14才5	
15	足	シヨク	精燭合4	tsiauk	上 12才6	
16	璞	ハク	滂覺合2	p'auk	上 17才2	
17	藐	ハク (ハク)	明覺合2	mauk	上 8才4	仮名書注3箇有。
18	角	カク	見覺合2	kauk	上 11才4	
19	樂	カク	疑覺合2	gak	上 11才3	
20	裨	ヒ	幫紙合4	pjie ²	上 18才5	
21	裨	ヒ	並支合4	bjie ¹	上 6才4	
22	議	キ	疑寘合3	gie ³	上 15才7	
23	施	シ	審支合3	sie ¹	上 9才6	
24	瑞	シイ	禪寘合3	ziue ³	上 15才6	
25	鄙	ヒ	幫旨開3	piei ²	上 11才5	
26	鼻	ヒ	並至開4	bjie ³	上 14才4	
27	眉	ヒ	明脂開3	miei ¹	上 13才6	
28	耆	キ	群脂開3	giei ¹	上 4才3	
29	絺	チ	徹脂開3	t'iei ¹	上 7才3	
30	稚	チ	澄至開3	diei ³	上 11才6	去聲点不明確。
31	尼	チ	娘脂開3	niei ¹	上 7才6	
32	尸	シ	審脂開3	siei ¹	上 7才3	
33	透	クワイ	群脂合3	giuei ¹	上 7才3	
34	濠	スイ	心至合4	sivei ³	上 17才6	
35	誰	スイ	禪脂合3	ziuei ¹	上 15才1	
36	己	コ	見止開3	kiei ²	上 5才4	
37	慈	シ	從之開4	dziei ¹	上 5才7	
38	緇	シ	照之開2	tsiei ¹	上 9才2	
39	趾	シ	照止開3	tsiei ²	上 7才3	
40	時	シ	禪之開3	ziiei ¹	上 8才4	

41	已	イ	喻止開4	jɪɪ ²	上 5才7	
42	希	キ	曉微開3	xiɪ ¹	上12才4	
43	沸	ヒ	幫未合3	piɪ ³	上13才4	
44	彙	牛	喻未合3	ɣiui ³	上 4才5	
45	吠	ハイ	並廢合3	biai ³	上12才2	
46	舉	キヨ	見語開3	kiɪ ²	上 5才4	
47	舉	キヨ	見語開3	kiɪ ²	上 6才1	
48	舉	キヨ	見語開3	kiɪ ²	上 7才3	
49	渠	キヨ	群魚開3	ɕiɪ ¹	上 4才3	
50	渠	キヨ	群魚開3	ɕiɪ ¹	上18才1	
51	巨	キヨ	群語開3	ɕiɪ ²	上17才5	
52	序	シヨ	邪語開3	ziɪ ²	上 4才4	
53	鋤	シヨ	牀魚開2	dziɪ ¹	上15才6	
54	鋤	シヨ	牀魚開2	dziɪ ¹	上18才2	
55	所	ソ	審語開2	ɕiɪ ²	上 9才1	
56	所	ソ	審語開2	ɕiɪ ²	上16才3	
57	舒	シヨ	審魚開3	ɕiɪ ¹	上12才4	
58	於	ヨ	影魚開3	ʹiɪ ¹	上17才3	
59	甫	フ	幫虞開3	piuɪ ¹	上13才6	
60	甫	フ	幫虞開3	piuɪ ¹	上13才6	
61	務	ム	明遇開3	miuɪ ³	上15才1	飯名書注不明確。
62	住	チウ	澄遇開3	ɖiuɪ ³	上 4才1	
63	駒	ク	見虞開3	kiuɪ ¹	上12才1	
64	句	ク	見遇開3	kiuɪ ³	上 9才7	
65	趣	ス	清虞開4	tsʰiuɪ ²	上14才2	
66	數	ス	審虞開2	ɕiuɪ ²	上 8才4	
67	浦	ホ	並模開1	buɪ ¹	上 6才3	
68	闕	ト	端模開1	tuɪ ¹	上 4才3	
69	徒	ト	定模開1	duɪ ¹	上 4才7	
70	杜	ト	定姥開1	duɪ ²	上 5才7	
71	姑	コ	見模開1	kuɪ ¹	上 4才3	
72	詬	コ	見姥開1	kuɪ ²	上 7才6	
73	吳	五	疑模開1	ɣuɪ ¹	上 7才6	五→疑姥開1 ɣuɪ ²
74	吳	五	疑模開1	ɣuɪ ¹	上18才5	五→疑姥開1 ɣuɪ ²
75	祖	ソ	精姥開1	tsuɪ ²	上12才6	
76	徂	ソ	從模開1	dzuɪ ¹	上 5才7	
77	虎	コ	曉姥開1	xuɪ ²	上10才2	上声点不明確。
78	戸	コ	匣姥開1	ɣuɪ ²	上18才5	
79	倍	ハイ	幫海開1	piɪ ²	上 7才7	
80	黛	タイ	定代開1	dɪɪ ³	上11才7	
81	綵	サイ	清海開1	tsʰɪɪ ²	上16才3	
82	佩	ハイ	並隊合1	buɪ ³	上13才1	

83	珠	ハイ	明隊合1	muai ³	上13才1	
84	恢	クイ	溪灰合1	kui ¹	上19才2	
85	借	カイ	見皆開2	kei ¹	上5才4	
86	淮	エ	匣皆合2	yuai ¹	上18才5	
87	邁	クワイ	明夬合2	mai ³	上16才2	仮名書注疑し、「快」溪夬合3か母字か?
88	憇	ケイ	溪祭開3	k'ai ³	上16才1	
89	偈	ケイ	群祭開3	giai ³	上16才1	
90	掃	チ	端齊開4	tei ¹	上14才6	
91	稽	ケイ	見齊開4	kei ¹	上6才16	
92	計	ケイ	見霽開4	kei ³	上4才5	
93	猊	ケイ	疑齊開4	nei ¹	上17才2	
94	慧	ケイ	匣霽開4	yei ³	上9才2	去声点不明確。
95	銳	セ	喻祭合4	jiuai ³	上13才7	
96	買	ト	明蟹開2	me ²	上8才4	仮名書疑し。
97	買	ハイ	明蟹開2	me ²	上14才7	
98	解	カイ	見蟹開2	ke ²	上17才7	
99	晝	エ	匣卦合2	yu ³	上12才3	
100	渾	コム	匣魂合1	yu ¹	上7才5	平声点不明確。
101	沒	ホ	明没合1	mut	上6才3	
102	訥	トオ	泥没合1	nut	上18才4	仮名書注「トツ(P)」の誤写か。
103	殞	ヲオ	影没合1	u ¹	上10才6	仮名書注「ヲツ(P)」の誤写か。
104	瑟	シ	審櫛開2	set	上7才4	
105	繫	巾	見軫開4	kien ²	上11才1	巾→見眞開3 kien ¹
106	晉	シ	精震開4	tsien ³	上17才1	
107	刃	神	日震開3	nen ³	上9才4	神→牀眞開3 d'zien ¹ , 「大」?
108	畢	ヒツ	幫質開4	pjiet	上7才1	
109	必	ヒツ	幫質開4	pjiet	上12才2	「質眞定」の「定」は「必」の誤写か。
110	質	シテ	照質開3	tsiet	上12才2	
111	律	リ	來術合3	liuet	上17才5	
112	問	モ	明問合3	miu ³	上15才1	
113	幹	カ	見輪開1	kan ³	上9才4	
114	岸	カ	疑輪開1	gan ³	上9才4	
115	旱	カ	匣旱開1	yan ²	上9才7	
116	割	カツ	見曷開1	kat	上8才1	
117	薩	セ	心曷開1	sat	上7才5	仮名書注疑し。「セチ」の誤写か。
118	刺	ラ	來曷開1	lat	上7才7	
119	滿	マ	明緩合1	man ²	上9才7	
120	湏	ム	泥緩合1	nuan ²	上17才5	
121	換	ク	匣換合1	uan ³	下2才4	入声点?
122	颶	ハ	並末合1	bat	上10才1	
123	軒	ケ	曉元開3	xian ¹	上15才6	

124	販	ハ	翫願合3	pian ³	上 5才2	
125	販	ハ	翫願合3	pian ³	上 13才2	
126	煩	ハ	並元合3	bian ¹	上 5ウ2	
127	曼	ハ	明願合3	mian ³	上 13才2	「借音莫般反(明桓合1)」とあり。
128	袁	エ	喻元合3	ɣuan ¹	上 5ウ2	仮名書法不明確。
129	曰	エ	喻月合3	ɣuat	上 6才1	
130	辨	ハ	並彌開3	bian ²	上 8ウ1	
131	勉	ハ	明彌開3	mian ²	上 8ウ1	
132	騫	ケ	溪仙開3	k'ian ¹	上 11ウ7	
133	面	メ	明線合4	mjian ³	上 12才7	
134	黠	カ	匣黠開2	ɣat	上 8才2	
135	𪛗	ハ	明銑開4	men ²	上 14才3	
136	甸	テ	定霰開4	den ³	上 14ウ3	
137	硯	ケ	疑霰開4	nen ³	上 14才7	
138	寶	ホ	幫皓開1	pau ²	上 9ウ5	
139	報	ホ	幫号開1	pau ³	上 16ウ5	
140	惱	タ	泥皓開1	nau ²	上 5ウ2	
141	誥	カ	見号開1	kau ³	上 9才4	
142	耗	カ	曉号開1	xau ³	上 16ウ6	
143	浩	カ	匣皓開1	ɣau ²	上 14ウ4	
144	懊	ア	影号開1	'au ³	上 5ウ2	
145	樂	カ	疑效開2	ɣau ¹	上 8才7	
146	藐	ハ	明小合4	mjiau ²	上 8才4	仮名書法3箇有。
147	兆	テ	澄小開3	diau ²	上 13ウ3	
148	喬	ケ	見宵開3	kiau ¹	上 6才1	
149	牆	ケ	見宵開3	kiau ¹	上 6才1	
150	沼	セ	照小開3	tsiau ²	上 12ウ1	
151	召	セ	禪笑開3	ziau ³	上 3ウ7	
152	遶	セ	日小開3	ɣiau ²	上 12ウ1	
153	繞	セ	日小開3	ɣiau ²	上 12ウ1	
154	𪛗	ニ	日小開3	ɣiau ²	上 5ウ2	
155	馱	タ	定箇開1	da ³	上 6ウ5	
156	可	カ	溪寄開1	k'a ²	上 15才7	
157	法	キ	溪戈合3	k'ua ¹	上 11ウ7	
158	伽	カ	群戈合3	ɣua ¹	上 6才3	
159	伽	キ	群戈合3	ɣua ¹	上 6才4	
160	遐	カ	匣麻開2	ɣa ¹	上 12ウ5	
161	𪛗	サ	精麻開4	tsia ¹	上 6才5	
162	邪	ヤ	喻麻開4	jia ¹	上 6才5上	
163	𪛗	ラ	來唐開1	laŋ ¹	上 8才5	
164	郎	ラ	來唐開1	laŋ ¹	上 15ウ1	

165	薄	ハク	並鐸開1	bak	上 7才7	
166	索	サク	心鐸開1	sak	上10才7	
167	郭	クワ	見鐸合1	kuak	上 4才5	
168	紡	ハル	並陽開3	bian ¹	上 4才6	
169	房	ハル	並陽開3	bian ¹	上 6才7	
170	妄	ハル	明漾開3	mian ³	上13才6	
171	相	生	心陽開4	sian ¹	上 9才5	生→審庚開2 san ¹
172	向	キヤ	曉漾開3	xian ³	上19才2	
173	央	アル	影陽開3	ʹian ¹	上 4才6	
174	爵	シヤ	精藥開4	tsiak	上 8才4	
175	病	ハイ	並映開3	bian ³	上17才3	
176	明	メイ	明庚開3	mian ¹	上10才2上	
177	孟	マル	明映開2	man ³	上14才4	
178	鄭	定六	澄勁開3	dien ³	上 5才5	定→定徑開4 den ³ , 「六」?
179	征	セイ	照清開3	tsien ¹	上17才下	
180	盈	エイ	喻清開4	jiēn ¹	上 4才2	
181	盈	エイ	喻清開4	jiēn ¹	上 9才4	
182	石	セキ	禪昔開3	ziek	上 4才2	
183	亦	エキ	喻昔開4	jiek	上13才1	
184	懌	エイ	喻昔開4	jiek	上16才2	仮名書法疑し。
185	並	ハイ	並迥開4	ben ²	上13才7	
186	挺	テイ	定迥開4	den ²	上16才4	
187	靈	レイ	來青開4	len ¹	上 4才3	
188	剔	テイ	透錫開4	t'ek	上 6才4	仮名書法疑し。
189	不	フ	幫有開3	piu ²	上 8才5	
190	富	フ	幫有開3	piu ³	上 5才2	
191	副	フ	滂有開3	p'iu ³	上 7才6	
192	鳩	キウ	見尤開3	kiu ¹	上17才5	
193	丘	キウ	溪尤開3	k'iu ¹	上 5才1	
194	丘	キウ	溪尤開3	k'iu ¹	上15才3	「近」は誤写か。
195	牛	キウ	疑尤開3	ŋiu ¹	上 5才1	
196	祝	シウ	照有開3	ŋiu ¹	上 7才7	入声蓋不明確。仮名書法2箇有。
197	醜	シウ	穿有開3	ts'iu ²	上16才7	
198	受	シウ	禪有開3	ziu ²	上16才5	
199	休	キウ	曉尤開3	xiu ¹	上 9才4	
200	優	イウ	影尤開3	ʹiu ¹	上10才7	
201	又	イウ	喻尤開3	ɣiu ¹	上 5才2	
202	由	イウ	喻尤開4	jiu ¹	上 5才6	
203	由	イウ	喻尤開4	jiu ¹	上10才5	
204	𠂔	イウ	喻有開4	jiu ²	上 2才4	𠂔は酉の故。𠂔(𠂔)と誤認。
205	𠂔	イウ	喻有開4	jiu ²	上 2才4	𠂔は酉の故。

206	酉	イウ	喻有開4	jiɿu ²	上 2才4	
207	酉	イウ	喻有開4	jiɿu ²	上16ウ5	
208	誘	ショ	喻有開4	jiɿu ²	上18才5	
209	恂	シウ	?		上 5才2上	「恂人九反(白有開3 ɿɿu ²)」とあり、
210	柔	ショ	日尤開3	ɿiɿu ¹	上17才5	
211	久	ク	見有開3	kiɿu ²	上 8才6	
212	修	シユ	心尤開4	siɿu ¹	上10ウ3	
213	母	ホウ	明厚開1	mɿu ²	上 7ウ6	
214	泥	トウ	泥侯開1	nɿu ¹	上 6ウ5	
215	泥	トウ	泥侯開1	nɿu ¹	上 6ウ5	
216	溝	コウ	見侯開1	kɿu ¹	上 6ウ5	
217	溝	コウ	見侯開1	kɿu ³	上15才2	
218	藕	コウ	疑厚開1	ɣɿu ²	上 4才1	
219	漚	オウ	影侯開1	ʔɿu ¹	上10ウ5	
220	樓	ロウ	來侯開1	lɿu ¹	上 6才4	
221	咸	カム	匣咸開2	ɣem ¹	上15ウ4	
222	檢	ケム	見琰開3	kiem ²	上15ウ7	
223	艷	エム	喻豔開4	jiɿm ³	上17ウ2	
224	怯	ケフ	溪業開3	k'iap	上 6ウ6	
225	甘	カム	見談開1	kam ¹	上 8才4	
226	敢	カム	見敢開1	kam ²	上 9ウ6	
227	檻	ラム	來談開1	lam ¹	上13才4	
228	檻	ラム	來談開1	lam ¹	上19才5	
229	品	ピム	滂寢合3	p'iem ²	上 4才4	
230	錦	キム	見寢合3	kiem ²	上 4才4	
231	肯	コレ	溪等開1	k'ɿŋ ²	上 7ウ3	
232	肯	コレ	溪等開1	k'ɿŋ ²	上15才7	
233	則	ソク	精德開1	tsɿk	上13ウ4	
234	勒	ロク	來德開1	lɿk	上10才2	
235	勝	ショ	審證開3	siɿŋ ³	上17ウ6	
236	應	ヨ	影蒸開3	ʔiɿŋ ²	上15ウ4	
237	陟	トク	知職開3	tɿɿk	上 4ウ6	
238	陟	トク	知職開3	tɿɿk	上 7ウ3	
239	直	チク	澄職開3	t'ɿɿk	上11ウ2	
240	式	シク	審職開3	siɿk	上 7ウ3	
241	式	ソク	審職開3	siɿk	上13ウ4	
242	歛	クウ	曉物合3	xiuɿt	上 4ウ5	
243	廈	ユ	審尤開2	ɿɿu ¹	上10才7	
244	店	テム	端禡開4	tem ³	上12ウ5	

〔表2〕

攝	轉回	一	二	三	四	轉回	一	二	三	四					
通	1	東屋	東 ㊦レ(ル)												
	2	冬沃	屋 ㊦ク(ホク)												
江	3		鍾 ㊦ヨレ(ホレ, クヨレ)												
			濁 ㊦ヨク												
止	4		江 ㊦ク(シヤク)			5		支(シイ)							
	6		支 ㊦			7		脂 ㊦イ(クワイ)							
	8		脂 ㊦												
	9		え ㊦(ニ)												
遇	11		微(キ)			10		微(ヒ, 牛)							
			魚 ㊦ヨ(ソ)			12	模 ㊦	虞 ㊦(チウ)							
蟹	13	哈 ㊦イ	皆夫(カイ)	祭 ㊦イ	齊 ㊦イ(チ)	14	反 ㊦イ(クワイ)	皆夫(エ)	祭	齊					
	15	泰	佳(ハイ)	廢	祭	16	泰	佳(エ)	廢(ハイ)	祭(セイ)					
臻	17	痕 ㊦イ	臻 ㊦イ(シ)	真 ㊦イ(シレ)	眞 ㊦イ(シヤル)	18	魂 ㊦イ(シ)	諄 ㊦イ(リレ)							
	19			欣 ㊦イ		20		文 ㊦イ(モレ)							
山	21		山 ㊦イ	元 ㊦イ(クレ)	仙 ㊦イ(メレ)	22	山 ㊦イ(メレ)	元 ㊦イ(シ)	仙 ㊦イ(シ)						
	23	寒 ㊦イ(シヤク)	刪 ㊦イ(カツ)	仙 ㊦イ(カ)	先 ㊦イ(メレ)	24	桓 ㊦イ(ハ)	刪 ㊦イ	仙 ㊦イ	先 ㊦イ					
效	25	豪 ㊦イ(ホウ)	肴 ㊦イ(カウ)	宵 ㊦イ(ニウ)	蕭										
	26				宵 ㊦イ(ハウ)										
果	27	歌 ㊦イ				28	戈		戈 ㊦イ(カ)						
假	29		麻(カ, サ, マ)			30		麻							
宕	31	唐 ㊦イ(シヤク)	陽 ㊦イ(キヤウ)			32	唐 ㊦イ(クワク)		陽						
梗	33		庚(マレ)	庚(シ)	清 ㊦イ(シ)	34		庚	庚	清					
	35		耕 ㊦イ	清 ㊦イ(セイ)	青 ㊦イ(シ)	36		耕		青					
流	37	侯 ㊦イ	尤 ㊦イ(ウク)												
深	38		侵 ㊦イ												
咸	39	覃 ㊦イ	咸(カム)	鹽(クム)	添(シム)										
	40	談 ㊦イ	銜	嚴	鹽(シム)										
	41	盍	狎	業	業										
曾	42	登 ㊦イ	蒸 ㊦イ(ヨレ)			43	登 ㊦イ		蒸 ㊦イ						